# 体育授業の主観的意味概念に関する事例的研究
## ―小学校6年生の体育授業を通して―

鈴木　誠直

# A Case Study of the Subjective Value Concept in Physical Education

Masanao SUZUKI

## Ⅰ　研究の目的

歴史を振り返ってみると，「楽しい体育」，「めあて学習」といった概念の導入を受け，体育はさまざまに変化してきた。平成20年の学習指導要領の改訂に伴い，現在も変化している。このような中，子どもの側から体育を捉えなおしてみる必要があると考えた。

本研究は，体育授業に対する子どもの主観的意味概念を抽出して，子どもの側から体育の価値を捉えなおすことを目的とする。

## Ⅱ　研究の方法

子ども（筆者が担任を務める6年生1クラス35名）が書いた体育授業（水泳，跳び箱運動，バスケットボール，走り幅跳び）の感想文から，戈木の「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」[1)]を援用することによって概念を抽出する。

## Ⅲ　体育授業における主観的意味概念の抽出

### 1 「水泳」の主観的意味概念

(1)　抽出された主観的意味概念

表1「水泳」に関する主観的意味概念

| 上位概念 | 下位概念 |
|---|---|
| 運動の喜び | 運動結果としての喜び　成就感<br>測定記録　泳ぎの心地よさ<br>楽しい教具　上達意欲 |
| 観察力 | 他者観察 |
| 適正評価 | 運動課題の妥当性 |
| 共同的他者 | 感覚の共有　共同的他者 |
| 経験量 | 運動課題の経験量 |
| 身体操作 | ストロークコントロール<br>呼吸法　脱力　浮き身バランス<br>水中バランス　推進力 |
| 身体感覚 | 身体を通しての理解<br>水中抵抗感覚 |

(2)　考察

「水泳」における概念の抽出から，次のような指標を得ることができた。

「心地よさ」（「水泳の心地よさ」から）

教師は「水泳」を，克服する種目として捉えることが多い。そのため，子どもは，苦しくてもがんばらなければいけなくなる。「心地よさ」を味わうことが重要である。

「『がんばる』から『楽』への転換」（「脱力」，「水

泳の心地よさ」から）

忍耐を伴う練習では，水泳を嫌う子もいる。そのため,「楽」に浮く,「楽」に泳ぐといったイメージの転換が必要である。

「循環的フィードバック」(「身体操作」,「身体感覚」から）

水中での「身体操作」によって得られる「身体感覚」が，再び「身体操作」へとフィードバックされる。この繰り返しによって「泳ぐ」という表象ができあがる。

**2 「跳び箱運動」の主観的意味概念**

⑴ 抽出された主観的意味概念

表2「跳び箱運動」に関する主観的意味概念

| 上位概念 | 下位概念 |
|---|---|
| 運動の喜び | 運動結果としての喜び　達成<br>達成意欲　自己実現　恐怖心 |
| 実行的態度 | 実行的態度 |
| 達成への思考 | 困惑　系統性の疑問 |
| 共同的他者 | 共同的他者　教師の指導 |
| 観察 | 他者観察 |
| こつの習得 | 簡単言語　無意識　指標<br>場の適正　身体操作　こつの忘却<br>できそうな感覚　主観的なこつ |
| 身体感覚 | 空中感覚　スリル　接触感覚 |

⑵ 考察

「跳び箱運動」における概念の抽出から，次のような指標を得ることができた。

「必要条件としての達成」(「達成」から）

「達成」は,跳び箱運動の中核をなす概念であり,できることは,必要条件である。ただし,「できる」ことを段階的に，多様に捉える必要がある。

「オフタスクの価値」(「自己実現」から）

自分がしたい運動をするという「自己実現」は,捉え方によっては,「オフタスク」とも考えられる。しかし，その運動は，その子にとって価値のあることで，その価値を授業に反映させていく必要がある。

「イリンクスの経験」(「身体感覚」から）

跳び箱運動には，もともとカイヨワ[注1)]の分類によるイリンクスの要素が多分に含まれている。学年に関係なく，落下，回転などの感覚を十分に味わわせる必要がある。

**3 「バスケットボール」の主観的意味概念**

⑴ 抽出された主観的意味概念

表3「バスケットボール」に関する主観的意味概念

| 上位概念 | 下位概念 |
|---|---|
| 運動の喜び | 運動結果としての喜び<br>勝敗結果　シュートの達成<br>ボール保持　貢献度 |
| ゲーム様相 | ゲーム中の判断　原則崩し<br>原則的なプレー　ボール操作 |
| 共同作戦 | 作戦の遂行　作戦の検証 |
| 観察 | 自己観察　ゲーム観察 |
| めあて意識 | めあて意識 |
| 感情的言語 | 感情的言語 |
| 親和的集団 | 親和的集団　社会性の学び |

⑵ 考察

「バスケットボール」における概念の抽出から，次のような指標を得ることができた。

「貢献的喜び」(「貢献度」から）

チームに貢献できたという喜びを味わうことが，運動への好意的態度を形成することになる。

「原則の理解」(「原則的なプレー」,「原則崩し」から）

いつ，何をすればよいのかという原則を示し，段階的に判断の学習を取り入れていく必要がある。

「雰囲気から運動の価値へ」(「親和的集団」から）

「雰囲気がいいからよい授業」という評価をされることがある。運動そのものの価値に触れているかどうかに着目していく必要がある。

### 4 「走り幅跳び」の主観的意味概念

(1)　抽出された主観的意味概念

表4「走り幅跳び」に関する主観的意味概念

| 上位概念 | 下位概念 |
|---|---|
| 運動の喜び | 走り幅跳びの好嫌　競争<br>羞恥心　跳躍意欲　跳躍量<br>コース設定　困惑の実感<br>跳躍の心地よさ　跳躍距離 |
| 従順的態度 | 従順な態度 |
| 思考力 | 情報の棄却　困惑　関係性 |
| 身体操作 | 勢い　跳躍高　リズム変換<br>両足着地　踏み切り位置調整<br>バランス保持 |

(2)　考察

「走り幅跳び」における概念の抽出から，次のような指標を得ることができた。

**「教師側からの特性」**（全ての概念から）

子ども側の特性を受け止め，大きく捉えて整理し，授業を構成していくことが教師側の特性の捉えである。

**「必要性のある運動課題」**（「運動の喜び」から）

子どもに「うまくなりたい」という願望が生じてから，適した運動課題を示す必要がある。

**「対話」**（「思考力」から）

「陸上運動」には，比較的確立された技術観がある。それを教師が教え込もうとするため，教師と子どもとの対話はなく，一方的な技術指導になってしまう。子どもとの対話を通して，思考を働かせる必要がある。

### 5　体育の概念モデル

種目ごとの主観的意味概念を統合し，体育の全般的な概念を抽出して「体育の概念モデル」を示す。

表5　体育の概念

| 体育の価値 | |
|---|---|
| 運動に内在する価値 | |
| 運動の喜び | 感情的言語 |
| 身体感覚 | 観察 |
| ゲーム様相 | めあて意識 |
| 経験量 | 共同的他者 |
| 運動に対する態度 | 思考・判断 |

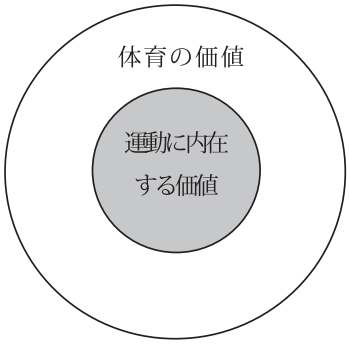


図1　体育の概念モデル

統合された体育の概念は，「運動に内在する価値」と，それを内包する「体育の価値」から捉えることができる。

### おわりに

本研究で示したことは，一般化することのできない，限定された実践から生み出されたものである。しかし，一般化されていないからこそ新しいのであり，注目する価値はある。本研究が，体育の授業観を転換させる一助になることを願う。

### 〈注〉

注1）カイヨワは，遊びを「アゴン（競争）」，「アレア（運）」，「ミミクリー（擬態）」，「イリンクス（眩暈）」の四つに分類した。

### 〈参考文献〉

1）戈木クレイグヒル滋子.「質的研究方法ゼミナール」.医学書院.2005

（指導教員　森勇示）